

講演会「アメリカの編集者の視点から
- 色とコラージュの絵本作家エリック・カール

平成 16 年 3 月 4 日
レナード・S. マーカス
Leonard S. Marcus

23 歳のグラフィックデザイナー、エリック・カールが、アメリカに永住するため、1952 年の春にドイツから戻ってきたとき、ニューヨークはビジュアルアートのめくるめく新しい世界の中心地でした。第二次世界大戦の前の数十年間は、ヨーロッパがグラフィックアートやグラフィックデザインにおける革新の第一線に立っていましたが、戦争が終わったあとは、ビジュアルコミュニケーションの中心地は西へと移動したのです。そして、快活で新鮮で、時には不遜なほどの広告芸術、ポスター、イラストレーションや児童絵本などへの取り組みは、ポール・ランド、レオ・レオニ、ベン・シャーン、その他の作者たちの作品で開花し、異花受粉されました。アメリカで生まれ、ドイツで教育をうけたカールが深くはまっていたのは、このとても豊かな創造的環境でした。この中で彼は、初めは有能なコマーシャルアーティストとして、それから彼の有名なあおむし同様に变身して、輝くような優しさと、詩的な洞察力と、卓越した絵画力を持つ絵本の作家として芽を出したのです。

物語の作者として、カールは早くから古代からの寓話の伝統に合わせていました。おそらくそうすることが、彼にとっては自然だったのでしょう。それは、彼の生涯を通しての動物の世界への関心のせいだけではなく、単純で説明的な寓話の分野は、すぐに理解できるような絵や記号を好むところが、戦後のグラフィックアートの国際的なスタイルと共通していたからです。イソップのずる賢いキツネや働き者のアリ、怠け者のキリギリス、のろまだけれども着実に進むカメ、そして自信過剰のウサギなどの寓話から得られる教訓は、常に自明のことです。同様に、カールの『はらぺこあおむし』や『ごちゃまぜカメレオン』、『くもさんおへんじどうしたの』、『ごきげんななめのとんとうむし』、『さびしがりのほたる』、『パッチン！とんでコメツキくん』に出てくる主人公たちは、自分たちの自己発見の瞬間へ向かってうごめいたり飛んでいったりしています。読者は、物語と自分たち自身の共通点を、容易に見つけることができるのです。

イソップやラ・フォンテーヌの寓話の中に出てくる虫や動物たちは、動物の格好をした人間なのです。焦点はしっかりと人間性に置かれています。こういった古い物語とは対照的に、カールの絵本の物語は両方に作用しています。基本的な人間の関心事、例えば仲間づきあいとか、満足のいく仕事をする事の大切さなどについて述べながらも、最も小さ

な（そして最も厄介な）昆虫から命を与えてくれる太陽に至るまで、自然それ自体への純粹な関心をも表現しているのです。物語の中で示されているように、世界は魅惑的なほどに広くて、色々な人生の形の側面を持っていて、また子どもたちにとっては、癒される家庭でもあります。子どもたちに、生活の面では、安全で大切にしてもらえ、本当の場所があるのだと安心させます。またカールは（彼らの情緒面での発達のためと同様な重要さで）知識を得たり、冒険したりすることのほとんどが、自分自身や人間の範囲をこえたところにあると示しています。

その上カールは、これをひねくれたユーモアと容易に見える外観で仕上げています。例えば『できるかな？あたまからつまさきまで』では、子どもたちは楽しげに屈んだり伸びたりして、サルやキリンといった仲間の動物たちの傍らで、自分たち自身の判断で物事を見極めていきます。『カンガルーの子どもにもかあさんいるの？』では、幼い子どもたちが、大きな観点から自分の経験を振り返ることが出来るように、さりげなく問いかけています。それに続く動物の母子の色彩豊かなパノラマは、動物の世界の中での類似点（そして相違点）というテーマで絵に描かれたエッセイです。それは同時に、全ての人間関係の基本となるものを確信しているのです。中心となる 2 本の糸を一緒に結び合わせて文章は終わります。

「それで どうぶつのかあさんって、子どもが すきななの？」

「ええ、ええ、もちろん！ すごく すごく 子どもが すきななの。」

どうぶつのかあさんは とっても子どもを かわいがるわ。

あなたのかあさんが あなたをかわいがると そっくりおんなじよ。」

（佐野洋子訳、偕成社）

カールの本の中では、言葉はお話の一部を語っているに過ぎません。年のいかない幼い子どもたちが、もっと直接的に理解できるような素晴らしさをもった絵というものが、特別な役割を果たしています。それは、読書を始める前の子どもたちが、心躍らせ、もう自分ひとりで読めるということを発見する、第二の物語言語としての役割です。この方法でカールは、彼の読者たちに、自分で本を読むという楽しみを一步先んじて味わう機会を与えています。実際、彼の本は全ての面で、子どもたちの自立心の芽生えを支えるようにと目指しています。ですからカールの作品の特徴的な要素の一つである空白のスペースは、それが囲んでいる大胆な色彩を引き立たせるための、単なる形式的な、または文体上の役割を果たしているだけではないのです。ページ上のこういった空白あるいは手を加えられていない部分は、子どもたち自身が想像できる余地を残しているのです。同じ精神で、カールがコラージュ（戦後のグラフィックアーティストたちが、ビジュアルな表現の新しい、もっと自由な、精神の言語を求めて好んだ技術）を使ったことは、多くの小さな子どもたちが、すでに自分自身で何度か経験したような絵の描き方を、彼が好んだことを示してい

ます。その子どもたちにとって、カールの優しいけれども鋭いイラストレーションは、自分たち自身の絵をもっと描くようにと、勧めてくれているようなものです。そして彼の作品を、完成された芸術としてではなく、やりがいのある楽しい出発点として見るのです。

カールがプロとしての訓練を受けたのはもっぱらグラフィックアートでしたが、彼は自分の仕事に、ジョン・デューイや、スプラグ・ミッチェルや、その他の先鋭的で革新的な編集者たちによって、1900年代の初期のころにアメリカで最初に宣言されたような、幼児期の発達についての基本的な洞察を吸収していました。これらの発見の要点は、子どもたちが最もよく学ぶことができるのは、その教育の中で、十分にそして積極的に、協力者となるように力づけられたときであることがわかったことです。その後カールは、絵本作家は、子どもたちに高所から話しかけるより、むしろ幼い者たちと同じ目の高さで向き合う方法を探しあて、子どもたちの探検や参加への自然な要求を指導する事によって、創造力を育てるべきであるという考えに至りました。

この考えを本という形で表す際に、カールはおもちゃやゲームのような可能性を取り入れることを避けませんでした。初期の頃には、危険を覚悟でそうしました。というのは、1950年代～1970年代のアメリカの図書館員の批評家たちは、絵本の主流とは、伝統的なイラストレーションで物語をよく語っているものであるべきと定義していたのです。カールが『はらぺこあおむし』で試みた、丸く切り取られた穴や、様々な大きさのページなどの斬新な装飾は、これらの批評家たちには、本を亜文学やおもちゃのような位置に低めるものだとして、好まれませんでした。幼児のための本作りにおいて、進歩的な幼稚園の両親や教師たちには、カールの独創的な考えが認められていましたが、図書の世界が追いつくまでには何年もかかりました。アメリカ図書館協会は、2000年に生涯の業績を讃える賞であるローラ・インガルス・ワイルダー賞をカールに授与しました。協会は、彼のシンプルな絵本が持つ芸術性と洞察力とを遅まきながら認めたのです。

カールはこのような抵抗にあった最初の絵本作家ではありませんでした。一世代前のマーガレット・ワイズ・ブラウンは、『おやすみなさいお月さま』や *The Runaway Bunny*『ぼくにげちゃうよ』やその他の実験的な絵本の作者として、同じような批評を受けました。それらの本は、起承転結のある伝統的な物語のようではなく、もっと謎解きゲームや判じ物や押韻のリストに近いもののように思えるものでした。ブラウンはさらに因習を破って、巧みにタイトルを付けた *Little Fur Family*『ちっちゃなほわほわかぞく』を出版しました。その本には、知りたがり屋の幼い子どもたちが撫でたり出来るように、ウサギの毛皮のカバーがついていました。そして *Noisy Books* のシリーズでは、小さな聞き手たちが、声をあげ、出来る限り騒々しく、答えるように導きました。

ブラウンが先に大成功を収めたことや、『はらぺこあおむし』が素晴らしい人気を博したことに力を得て、カールは工夫に富んだ絵本を編み出し続けました。それらの本は、幼い子どもたちに、やってみたり、見たり聞いたりするものを与えるものでした。例えば『くもさん おへんじどうしたの』の中の特別に高く盛り上がったクモの巣の線は、働き者

の主人公の冒険物語に、触って理解することを加えています。そして『巨人（ジャイアント）にきをつけろ！』では、卓上の劇場でのパフォーマンスを即時に見せてくれます。読者たちはページを追いながら、落とし穴の蓋を上げ、通りに入念に作り上げられた手掛かりを通して、主人公の逃げ道の跡をたどります。子どもたちのおもちゃとして、二重の市民権を享受する絵本を創造しながら、カールはブラウンが彼より前にそうしたように、さらに大きな目的を心に強く留めていました。それは、本の世界や読むことを分かりやすくするということです。そうすることで、最も小さな子どもたちは、暮らしの中の彼ら自身の疑問を口にしたり、彼ら自身の目覚しい思考を巡らせたりすることで、子どもたちの驚きの感覚を確実なものにしていくのです。